

『学校を「ゆとり」のもてる場に』

小中学生の暴力行為が増えている。文部科学省の22年度全国調査によると、前年度比、2.2%増の約6万件に上り、全道各地では被害者が治療を受けるケースが前年度から倍増した。子ども達の心はなぜ荒れているのだろうか。どうすれば暴力を減らせるのだろうか。

ただ、「今の子ども達の暴力は、1980年代に激しかった校内暴力とは違う。」と言うのはNPO法人・キャリアプロデュース代表の元高校教師三井貴之さん。

1980年代どこの学校にも校内暴力の嵐が吹き荒れた。校内暴力はわかりやすかった。制服を着崩した「ヤンキー」が集団で教師に反抗したり、校舎の窓ガラスを割ったりしていた。中には先生達の努力だけでは校内暴力がなかなか収まらなく、管内には教育局の指導主事が1年間学校に張り付き生徒達の指導に当たったという学校もあった。

背景として考えられた一つの要因は、1970年代高校進学率が90%を超えたことが挙げられる。勉強が嫌いでも進学しなくてはならない中学生が受験のプレッシャーで「学校が面白くねえ」と不満をいだいたのだ。

「暴力事件を起こした生徒達も、教職員が腹を割って話をすれば、分かってくれたものだ。ただ、生徒の話に耳を傾けない教職員に対しては、いつまでも反抗が続いたのだが...。」と当時を思い起こして話してくれたのは檜山退職校長会の大内理事長だ。

それに比べ、今の子ども達の暴力は分かりにくい。特徴は「個別化」と「細分化」と定義する人もいるのだが、要するに、一人ひとりがちょっとした暴力を起こすのだ。動機もはっきりせず、イライラをぶつけているとしか思えない。

私のような団塊の世代派は中学生時代、1学年400名を超す生徒が在籍したが、校内暴力なるものの経験はなかったし、器物破損があったという記憶はない。ただ、天井裏に入り、授業中音楽室の天井を踏み外した仲間がいたことは忘れられない。当時、高校進学する生徒は約3割。後の生徒は就職または家事手伝い。進学する生徒は生徒で必死に勉強し、就職する生徒は自分に合わせた学習？で楽しい学校生活を送っていた。

戦後生まれの私たちの世代は昭和30年代に入ってもまだまだ貧しい家庭が多く、高校進学がままならない生徒もいた。中には中学卒業後、「金のタマゴ」と称されて東京、千葉、神奈川へと向かった仲間もいた。その職場先から夜間高校に通い、大学へ進学した者もいた。一方、勉強の嫌い

な生徒達には、中卒でも職を通して生きていける環境があった。

ところが、今はどうだろう。社会では大人が周りの「空気を読む」ことを強いられ、他人との距離を測りかねている。そうした対人関係の不安定さが子ども達の世界に投影されている。社会全体に積もるストレスを子ども達は敏感に感じ取っている。

学校が荒れた頃の暴力への対応には「やめろ」と言ったり、生徒の不満にじっくり耳を傾けたり、いろいろな対応があった。でも、今の「個別化」、「微細化」した暴力への対処は難しい。

では、学校は何をなすべきか。

学校が楽しく、心に余裕の持てる場にすることが問題解決への道である。そのためには先生達がどんな子も受け入れる包容力を備えていることである。指導力とともに人間味のある(人間的魅力)教員を育てたいのだが.....。

学校は社会の縮図。人間として成長し、社会的経験を積む場である。それを支える教員には高い能力と資質が求められる所以である。